

米軍保養地としての蒲郡

—秘蔵写真でたどる軍隊と娯楽—

阿部 純一郎

1. はじめに

——米軍保養地としての蒲郡

かつて愛知県蒲郡市に「竹島レストセンター」と呼ばれる米軍専用の保養地が存在した(図1)。場所は竹島海岸を望む蒲郡ホテル(現・蒲郡クラシックホテル)を中心に、周囲の旅館や娯楽場を含む約5万坪の範囲に及び、地域住民のエリア内への立ち入りは厳しく制限された。期間は1945年10月から1952年5月までの約7年間、すなわち米軍を主力とする連合軍に日本本土が占領されていた時代にあたる。



図1 竹島レストセンターの出入口ゲート

出典：蒲郡観光協会所蔵(蒲郡市博物館寄託)

竹島レストセンターは、戦後米軍が日本各地の観光ホテルを接収して作りあげた保養地の一例であり、東海地方では唯一のものだった。蒲郡以外

では、日光、箱根、軽井沢、熱海、雲仙などの日本を代表する観光地のホテルが接収され、米兵やその家族らが休養をとり娯楽を楽しむ場所へと生まれ変わった。兵士の休養・慰安を目的としたこれらのホテルは、当時「Rest Hotel」「Leave Hotel」(休養・休暇用ホテル)、あるいは「Special Service Hotel」と呼ばれ、1948年4月時点で日本全国に30ヶ所存在した(表1)。ちなみに「スペシャル・サービス」とは、軍隊内で兵士に提供されるレクリエーション活動全般(読書、観光、スポーツ、芸能、音楽、アート、クラフト活動など)を指す米軍独特の用語で、上述のレストホテルは米陸軍のスペシャル・サービス局が管轄していた。

本稿では、東海地方唯一の米軍保養地として数多くの米兵を受け入れた蒲郡を事例に、占領期の米軍保養地の運営方法や利用状況を明らかにする。蒲郡の占領に関しては、『蒲郡市誌』(1974年刊)やその記述を踏襲した『蒲郡市三十年史』(1984年刊)、『蒲郡市史』(2006年刊)に数ページの記載があるのみで、東京・神奈川(横浜)・京都・神戸など関東・関西方面の占領に比べて実態解明が進んでいない。そこで本稿では、筆者が現在進めている旧蒲郡ホテル関係者への聞き取り調査、占領期に蒲郡で撮影された写真、さらに米軍発行の内部文書および新聞記事の記載を手がかりに、なぜ蒲郡が米軍保養地として選ばれたのか、米兵たちは蒲郡でどんな娯楽を楽しんでいたかに迫りたい。

表1 米軍用レストホテル
(運輸省観光課調、1948年4月6日)

	所在地	ホテル名
栃木県	日光町	日光金谷ホテル
	日光町(中禅寺湖畔)	日光観光ホテル
	鬼怒川温泉	鬼怒川温泉ホテル
	川治温泉	柏屋ホテル
神奈川県	横須賀市(逗子)	逗子なぎさホテル
	足柄下郡(宮ノ下)	富士屋ホテル
	足柄下郡(強羅)	強羅ホテル
	足柄下郡(仙石原)	仙石原ゴルフクラブハウス
新潟県	中頸城郡(妙高高原)	赤倉帝国ホテル (赤倉観光ホテル)
石川県	石川郡(湯涌温泉)	白雲楼ホテル
山梨県	南都留郡(河口湖)	富士ビューホテル
	南都留郡(山中湖)	山中湖ホテル
長野県	下高井郡(上林温泉)	上林ホテル
	下高井郡(志賀高原)	志賀高原温泉ホテル
	軽井沢町	軽井沢万平ホテル
	軽井沢町	軽井沢ニューグランド ロッジ
静岡県	熱海市(伊豆山浜)	熱海ホテル
	熱海市(伊豆山浜)	樋口ホテル
	熱海市(伊豆山浜)	野村別邸(野村ハウス)
	熱海市(伊豆山岩下)	熱海体育ホテル
	沼津市	静浦ホテル
愛知県	蒲郡町	蒲郡ホテル
	蒲郡町	竹島館
滋賀県	大津市	琵琶湖ホテル
奈良県	奈良市	奈良ホテル
佐賀県	唐津市	唐津シーサイドホテル
長崎県	南高来郡(雲仙公園)	有明ホテル
	南高来郡(雲仙公園)	雲仙観光ホテル
	南高来郡(雲仙公園)	九州ホテル
熊本県	阿蘇郡	阿蘇観光ホテル

出典:運輸省観光部編(1949)『続日本ホテル略史』より筆者作成。

するまでの流れを概観しておく。1945年8月28日、米太平洋陸軍第11空挺師団の先遣隊が沖縄から厚木飛行場(神奈川県)に到着し、連合国軍の日本本土占領が始まった。その2日後の8月30日には米太平洋陸軍総司令官のダグラス・マッカーサーも厚木に到着し、9月2日には降伏文書調印、9月8日からは東京進駐が開始された。これらの東日本の占領を担当したのは米太平洋陸軍の第八軍(司令官はロバート・アイケルバーガー)であり、第八軍司令部は横浜税関ビルに置かれた。一方、愛知県を含む西日本の占領は第六軍(司令官はウォルター・クルーガー)が担当し、9月25日に和歌山港から上陸後、その日のうちに京都、神戸、大阪へと部隊を展開した(第六軍司令部は京都・大建ビルに設置)。さらに翌26日には第六軍管下の第25歩兵師団の先遣隊(副司令官E・ブラウン率いる20名程)が陸路京都から名古屋へと進駐し、名古屋観光ホテル(名古屋市中区)に

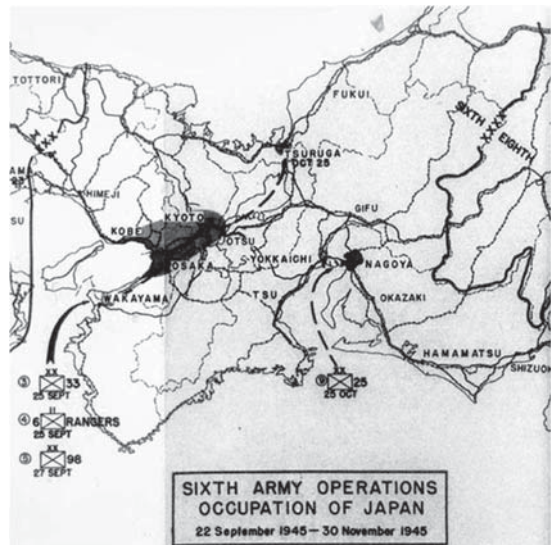


図2 第六軍の愛知県への進駐動向

出典:Sixth United States Army, *Report of the Occupation of Japan, 22 Sep - 30 Nov 1945* (国立国会図書館憲政資料室所蔵、『第二次世界大戦作戦記録(World War II Operations Reports, 1940-1948)』、請求記号:WOR14861-14862)

2. 米軍の愛知県進駐と保養地建設

まず米軍が愛知県に進駐し、蒲郡エリアを接収

師団司令部を置いた。その後も先遣隊は続々と愛知県に入り、主力部隊の進駐に備えて宿舎・輸送手段を確保するほか、各務原飛行場（岐阜県）、四日市港（三重県）、三菱航空機工場（知多郡大府町）、中島航空機（半田市）、岡崎飛行場（旧岡崎海軍航空隊基地）などの主要施設を検分した（新修名古屋市史編集委員会編1998：17-25）。

第25歩兵師団の本格的な進駐は当初10月8日を予定していたが、悪天候で伊勢湾の掃海作業が大幅に遅れ、実際に主力部隊（司令官C・L・モラン少将）が名古屋港へ上陸したのは、先遣隊到着から1ヵ月後の10月26日のことだった。本隊到着に伴い、名古屋観光ホテルにあった師団司令部は大和生命ビル（別名「徴兵ビル」）に移転し、名古屋観光ホテルは以後、「米軍将校の宿舎と宴会場」として使われた。また、翌46年1月に第六軍が日本占領の任を解かれて帰国すると（それに伴い、第八軍が日本全国の占領部隊を統括する）、第25歩兵師団の司令部は名古屋市から大阪市へ移され（1946年2月）、大和生命ビルには代わって第五空軍（1946年2月に東京から名古屋、小牧基地へ進駐¹⁾）の司令部が置かれることになる（のちに朝鮮戦争勃発により第五空軍司令部は韓国釜山に移駐）。

以上が米軍の愛知県への進駐過程であるが、そのうち蒲郡への駐留が始まったのは、1945年10月上旬である。『蒲郡市史』はその様子を次のように記している。

「昭和20年10月4日、米軍第11補充部隊長代理ハーター中佐ら一行が、ジープに乗って現れ、蒲郡ホテル・常盤館及びその他の施設を、米兵の休養地として利用するために検分した。その約10日後の10月15日から駐留が始まった。駐留の初日は、アメリカ軍ローズボーム大佐・ハーター中佐・県の職員がジープに乗ってやってきた。……接收地域は、蒲郡ホテル・常盤館・竹島館などを含め、東は三谷

との境界西田川、西は茶屋場東から遊園地入口までの五万坪（16万5000㎡）に及んだ。約1週間ごとに、大型バスに乗った250名を超える米兵が、接收地に入れ替わり立ち替わり来た。アメリカ兵は本国への帰還をひかえ、1週間から10日ほど過ごした。」（蒲郡市史編さん事業実行委員会編2006：28-29）

上記の記述で注目したいのは、このとき蒲郡の施設を調査した「第11補充部隊」という組織の位置づけである。その原名は「11th Replacement Depot」で、「第11補充処」とも訳される。「補充処」とは、占領任務を解かれてアメリカ本国に帰還する兵士や、新たに来日した補充兵の待機場所となっていた機関である。従来よく知られてきたのは、旧陸軍士官学校跡（神奈川県座間市・相模原市）に1945年9月に開設された「第4補充処（4th Replacement Depot）」（のちのキャンプ座間）であり、東日本に進駐した第八軍の兵士は入国または帰国の際、まずいったんは第4補充処に集結したといわれる（栗田2014：38）。一方、第11補充処は、岡崎海軍航空隊基地跡（愛知県岡崎市・安城市・豊田市）に1945年10月に開設され、西日本に展開する第六軍の兵士の待機場所として使われた²⁾。

第六軍の待機場所が関西方面でなく愛知県に設置されたのは、占領初期は神戸港や呉港の掃海作業が遅れ、兵員や物資の輸送拠点として名古屋港（1945年10月26日に操業開始）が中心的に利用されていたからだ（名古屋港操業以前は、限られた施設しかもない和歌山の港から輸送が行われていた）。1945年10月29日には帰還兵第一陣として、第六軍に所属する兵士（将校236名、下士官兵3087名）が名古屋港を出航し、シアトルへ旅立った³⁾。こうして第11補充処から帰国した第六軍兵士の数は、名古屋港操業開始1ヵ月後の1945年11月26日までに約2万7000名（将校2235名、下士官兵2万4318名）に達し、そのうち

95%が除隊者だったといわれる⁴⁾。名古屋港での帰還兵（および補充兵）の輸送業務は、1946年3月中頃まで続けられたという。

竹島レストセンターの3つの宿泊施設（蒲郡ホテル・常盤館・竹島館）は、もともとは第11補充処で待機する兵士たちの保養所として接收されたものだった。占領任務を終えて帰国する兵士が船を待つまでの間楽しむ滞在型の余暇施設として、米軍は第11補充処や名古屋港にほど近い蒲郡を選んだのである。この第11補充処用の保養施設としての位置づけは、第六軍が動員解除される1946年1月まで続き、それ以降は第八軍スペシャル・サービス局ホテル課（Hotel Division）の管轄に移された⁵⁾。

3. 蒲郡の占領軍と娯楽 ——秘蔵写真でたどる

本節では、筆者が蒲郡の関係者から収集した占領期の写真解説を中心に、米軍が竹島レストセンターをどのような仕方で運営し、どんな娯楽を楽しんでいたかを見ていく。今回紹介する写真は、所蔵別に以下の4つに分類される。①蒲郡クラシックホテル（旧蒲郡ホテル）所蔵写真、②蒲郡観光協会所蔵写真（蒲郡市博物館寄託）、③近藤家所蔵写真、④三村家所蔵写真である。③は、戦前横浜で写真技術を学び、戦後は形原（蒲郡市）で写真館を開業した近藤四郎氏（1911～1999）が撮影した写真で、蒲郡市博物館の企画展「写真家近藤四郎さんが写した蒲郡」（2019.7.20～9.1）で一般公開された。④は、常盤館・蒲郡ホテル・竹島館の運営を日本側の総支配人として統括していた三村三時氏（1891～1961）の所蔵アルバムである。

3-1. 竹島レストセンターの運営

まずは竹島レストセンター内の主要施設の写真から見ていこう。米軍に接收されたのは、名古屋

の繊維問屋・瀧兵（現タキヒョー）が経営していた3つの宿泊施設——常盤館（図3）、蒲郡ホテル、竹島館（図4）——と娯楽場「共楽館」である。常盤館は、瀧兵の五代目社長・瀧信四郎（1868～1938）が1912（大正元）年3月に開業した料理旅館で、その支配人には瀧兵社員の三村三時氏が抜擢された（瀧兵の歩み編集委員会編1961：54～57）。信四郎はその後も蒲郡の観光開発に尽力し、日本政府が外貨獲得を目的とした国際観光政策を推進する1930年代には、竹島と対岸を結ぶ「竹島橋」建設（1932年）、大衆娯楽場「共楽館」開業（1933年）、国際観光ホテル「蒲郡ホテル」開業（1934年）、大衆旅館「竹島館」開業（1937年）



図3 常盤館外観

出典：蒲郡観光協会所蔵アルバム（蒲郡市博物館寄託）



図4 竹島館外観

出典：蒲郡観光協会所蔵アルバム（蒲郡市博物館寄託）

など、蒲郡の観光発展の礎を築いた（砂本1999）。蒲郡が米軍保養地として指定されたのは、第11補充処や名古屋港への交通の利便性に加えて、戦前から蒲郡が観光開発をすすめて、県内有数の観光地として発展していたからである。

上記の施設は接收後、米兵が休暇・休養を楽しむ場所へと再編され、日本人客の利用は禁止された。図5は「TOKIWAKAN (EVERGREEN)」と記された英語表記の看板前で記念撮影する兵士、図6は米兵向けに映画上映などを行っていた「ATSUMI Theatre」（旧共楽館）の外観である。図7は、図4と同じ竹島館だが、第八軍の部隊章と「SPECIAL SERVICE」の文字を刻印したバス

が当時の時代状況を物語る。図8は、蒲郡ホテルの敷地内にある「聚美堂（しゅうびどう）」から小包片手に出てくる兵士を写したものだ。この建物は今でも敷地内に残っているが（現在は「六角堂」と呼ばれる）、接收時代は米兵向けに土産物を販売していた（入口の立て看板には「SHUWBIDO SOUVENIR DEPT.」の文字が判読できる）。

竹島レストセンターの運営方法について、『蒲郡市三十年史』は、「接收地内は、隊長を頂点として、補佐官一名、その下に労務・食堂・経理等のスタッフを置き、セットクロス〔ママ〕（看護婦と呼ばれていた）と称する女性軍属を加えた体制によって、管理・運営が行われていた。米軍側



図5 常盤館前で記念撮影する兵士

出典：近藤家所蔵資料より



図7 竹島館

出典：近藤家所蔵資料より



図6 共楽館（ATSUMI Theatre）外観

出典：近藤家所蔵資料より



図8 聚美堂（右奥の建物は蒲郡ホテル本館）

出典：蒲郡クラシックホテル所蔵資料より

は、計画立案・管理・監督を専らとし、事務・作業はすべて日本人が当たっていた」と記している（蒲郡市三十年史編纂委員会・蒲郡市教育委員会編1984：17）。三村家所蔵のアルバムには、初代隊長をつとめた第11補充処司令官のローズボーム大佐（Dwight A. Rosebaum）、ハーター補佐官（Harter）のポートレート写真が収められている（図9、図10）。いずれも本人のサイン入りで、三村支配人宛に贈られたものだ⁶⁾。

なお、上記の引用の「セットクロス」とは正確



図9 ローズボーム大佐

出典：三村家所蔵資料より

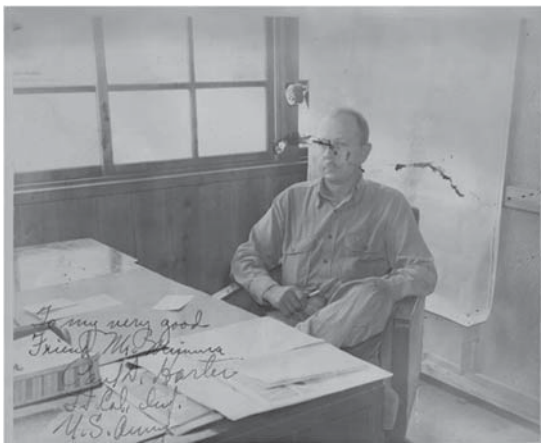


図10 ハーター補佐官

出典：三村家所蔵資料より

には「Red Cross」、すなわちアメリカ赤十字社のことである。米軍は駐留兵に様々なサービスを提供するうえで、アメリカ赤十字社を積極的に活用する方針をとっており、赤十字社の職員や物資の移動には高い優先順位を与えていた。こうして終戦直後から赤十字社の職員が続々と来日し、各地で医療施設・福祉事務所を開設するほか、米軍専用のクラブ、酒保（PX）、レストホテル、基地内の娯楽施設の運営に参加した（赤十字社運営のクッキー工場、キャンディー工場、ドーナツ工場なども存在した）。特にレストホテルの運営に関していえば、各レストホテルには赤十字社からレクリエーション指導員が派遣され、軍のレクリエーション担当者と協力してホテルでの娯楽プログラムを企画したり、周辺地域への観光ツアーを催行したりした。その他にも、主要なエリアには赤十字社運営のインフォメーションデスクが設置され、兵士からの様々な問い合わせ（日本旅館の宿泊料金、映画の上演内容など）に応じたという⁷⁾。

米軍当局が占領直後から兵士への娯楽サービスを重視したのは、駐留兵の士気（モラル）の低下や上層部への不満の発生を防ぐためだった（阿部2018）。なかでも兵士へのレクリエーション政策に強い関心を持っていたのは、第八軍司令官のアイケルバーガーである。彼は兵士のモラルを保つには余暇時間の充実が不可欠と考え、日本各地の観光ツアーや部隊対抗のスポーツ大会などを推奨した。また同様の観点から、1945年9月には第八軍スペシャル・サービス局に対して米軍用のレストホテルの建設を命じ、これを受けて部局内に「ホテル課（Hotel Division）」が新設され、米兵の保養施設に適したホテルの調査が行われた⁸⁾。ホテル開業後もアイケルバーガーはしばしば各地のレストホテルの視察に訪れており、1947年夏には蒲郡にも来訪している（図11、12）⁹⁾。図11は蒲郡ホテルの玄関前で撮られた一枚（左端の長身の男性がアイケルバーガー）、図12は「TAKESHIMA (BAMBOO ISLAND)」と記され



図11 アイケルバーガーの蒲郡視察1

出典：蒲郡観光協会資料



図12 アイケルバーガーの蒲郡視察2

出典：三村家所蔵資料

た看板をもつ施設(竹島館と推察される)を出て、車に乗り込む場面である(中央の男性がアイケルバーガー。その向かって右側に立つ女性と左端の女性は、肩章からアメリカ赤十字社の職員であることが分かる)。

3-2. 米兵は蒲郡で何をして遊んでいたか

次に、遊ぶ米兵の姿を追ってみよう。米軍発行の日刊紙『*Pacific Stars and Stripes* (星条旗新聞)』に掲載された蒲郡の特集記事(1949年9月14日付)には、蒲郡で楽しめる娯楽として、海水浴の

ほか、ヨット、乗馬、サイクリング、テニス、バレーボールなどが挙げられている。また、竹島館が運営するボート(「Sun Queen」号)を利用すれば20分ほどで三河大島にも上陸でき、島の美しい砂浜にはカラフルなビーチパラソルが立ち並び、ビールやコーラを販売するクラブハウスもある、と紹介されている。さらにホテルに駐在する軍のレクリエーション指導者(Elizabeth Mackin¹⁰⁾)の企画により、七宝焼の工房やPXに立ち寄る名古屋ツアー、鵜飼や寺院を鑑賞する岐阜ツアーも催行されていたようだ¹¹⁾。一方、日本側の記録としては、当時米兵の接遇をしていた蒲郡観光協会の回顧談に、「米兵の接待は貸し自転車、貸しヨット、洋上パーティ(三谷港に300トンの鉄船を繋留させていたキャバレー)など多彩」との記述が残っている(「蒲郡ホテル再開三周年に寄せて(8):戦後の竹島界限」『東海日日新聞』1990年9月22日)。

実際、馬や自転車、ヨットやボートに乗った兵士の姿は、三村家所蔵のアルバムや近藤四郎氏が撮影したポートレート写真に数多くみられる(図13、14、15、16)。図17・18は、蒲郡観光協会所蔵のアルバムに収録された三河大島の写真で、それぞれ「大島ホテル(進駐軍)」、「大島 海の家」



図13 馬に乗る(竹島レストセンター入口前)

出典：三村家所蔵資料



図14 ヨットに乗る

出典：三村家所蔵資料



図15 自転車に乗る（竹島橋にて）

出典：近藤家所蔵資料



図16 ボートに乗る

出典：近藤家所蔵資料



図17 大島ホテル

出典：蒲郡観光協会所蔵資料より



図18 大島 海の家

出典：蒲郡観光協会所蔵資料より

とキャプションが付けられている。さらに室内での娯楽として、蒲郡ホテルにはビリヤード場（図19）、蒲郡ホテルや竹島館にはバーカウンター（図20）なども設けられていた。

以上のような米兵たちの充実した余暇生活は、敗戦直後の極貧生活にあえいでいた日本人にとって、まさに夢の国の出来事だった。1949年から蒲郡ホテルで働きはじめた林義久氏は、空襲で大きな被害を受けた故郷の浜松（静岡県）を離れ、初めて蒲郡ホテルを訪れた時の様子を次のように語っている。

「[高台に建つ蒲郡ホテルの] 坂の下に警備の



図19 ビリヤード場（蒲郡ホテル）

出典：蒲郡クラシックホテル所蔵資料



図20 バーカウンター（竹島館）

出典：蒲郡クラシックホテル所蔵資料

詰所があり、その奥に向かって左側にずっと真赤な建物が続く。その道の右側手前に竹島館と書かれたグリーン色の木造三階建の建物があり、その横が広場になっていてアメリカ兵がキャッチボールをやっていた。建物の前には星条旗が翻っていて拡声器からは盛んに音楽が流れ、アメリカ軍の施設の前に来たのだという実感が湧いてくる。……（中略）……〔蒲郡ホテルの〕正面玄関を入ると入口の三段の踏み込みのところで、アメリカ人の可愛い子が三人遊んでいる。目の前にパッと開けた眩いばかりのシャンデリヤを見上げ、広々としたロビー、今迄電気もない暗闇で生活していた日の多かった私には、まるで伽の国のように目に映った。地下の二世食堂（支

配人と二世の支配人の食堂）に案内される。其処は元小酒場として使っていたのだろう。小さなカウンターとウイスキーの棚があった。間もなく支配人が現われ私についてくるように言われ、二階で一緒にエレベーターを降りると、右側は食堂になっていて賑やかに外人達を笑い声が漏れて来る。」（林1996）

図21は竹島館前の広場で野球を楽しむ米兵でおそらく林氏が目撃したのもこうした光景だったのであろう。図22は蒲郡ホテル2階の食堂（メインダイニングルーム）での食事風景であり、最前列で背を向けて座っている兵士は、肩章から判断す



図21 野球を楽しむ（竹島館前）

出典：三村家所蔵資料



図22 食事風景（蒲郡ホテル）

出典：三村家所蔵資料

ると第五空軍の兵士である。蒲郡ではこのような暮らしが日夜繰り返られていたのである。

4. まとめ

本稿では、東海地方唯一の米軍保養地だった蒲郡が、どのような経緯で接収され、いかなる方法で運営され、米兵にどのように利用されていたかを見てきた。従来の占領研究は、第八軍司令部が置かれた横浜や、GHQ/SCAPの司令部が置かれた東京に分析対象が偏っており、近年では京都、神戸、大阪など関西方面を対象とした研究も現れているが、愛知県の占領の実態解明は十分とはいえない。ただしこれは、米軍の日本占領にとって、愛知県が他の地域に比べて重要性が低かったことを意味しない。本稿で論じたように、占領初期には名古屋港が米軍の物資・兵員輸送の拠点として中心的な役割を果たしていたし、岡崎飛行場には第六軍の帰還兵・補充兵が集結する第11補充処が置かれるなど、愛知県には西日本の占領政策において鍵となる施設が存在した。また、1946年1月の第六軍の解体以降も、蒲郡は第八軍や第五空軍などに所属する兵士の保養地として利用され、朝鮮戦争期には戦場の兵士の一時的な休養場所としても利用されることになる（阿部2018）。

本稿で紹介した写真は、筆者が収集した資料のほんの一部であり、撮影場所などが特定できず紹介できなかったものも多い。今後も引き続き追加資料の発掘と関係者への聞き取り調査をすすめ、蒲郡における占領軍の娯楽の実態をより深く掘り下げていきたい。

付記

本研究はJSPS科研費（18K12953）の助成を受けたものである。また、研究にあたり関係者の皆様から、聞き取り調査や資料提供の面で多くのご支援をいただきました。近藤雅子様、林義久様、

三村美千子様、蒲郡観光協会、蒲郡クラシックホテル、蒲郡市博物館のご担当者の方々には、この場を借りて心から感謝申し上げます。

注

- 1) 『中部日本新聞』（1946年5月27日付）によれば、日本敗戦時、第五空軍は沖縄に司令部を置いていたが、日本本土占領に際して先遣隊として入間基地（埼玉県）に進駐し、翌46年1月には東京の明治ビルに移駐した。その後、マニラの太平洋空軍の東京移駐に伴い、東京から名古屋へと司令部を移し、小牧基地（1945年9月接収）に駐留した（新修名古屋市史資料編編集委員会編2012：14）。なお敗戦時、愛知県には小牧飛行場以外に6ヶ所の飛行場が存在したが、存続を許されたのは小牧飛行場だけである。その理由は、「終戦後の連絡飛行として運航した、いわゆる緑十字飛行の基地として使用されたことと、21年早々、名古屋に設置された米国第五空軍司令部の任務の必要性に基いたものであった」（「新飛翔」編集委員会編1999：3）。
- 2) 第11補充処が岡崎飛行場に存在したことは、米軍発行の日刊紙『星条旗新聞（*Pacific Stars and Stripes*）』（以下S&Sと表記）や米軍の内部文書などから裏付けられる。例えば「Perfect GI Life Promised At Depot for Dischargees」（S&S：1945.10.21）、「Sixth Army Redeployment Plan Speeded」（S&S：1945.11.12）。また第六軍の占領経過報告として、Sixth United States Army, *Report of the Occupation of Japan, 22 September 1945-30 November 1945*, pp. 64-65（国立国会図書館憲政資料室所蔵『第二次世界大戦作戦記録』請求記号WOR14861-14862）を参照。さらに『名古屋市広報』第882号（1945年11月29日付）は、当時愛知県に進駐した米軍部隊の主要宿舎の1つとして「岡崎飛行場」を挙げ、その使用部隊として「第11移動集積場」と記している（新修名古屋市史資料編編集委員会編2012：12）。
- 3) General Headquarters United States Army Forces, Pacific Public Relations Office, 1945.10.29, “Six Army Veterans Sail for Home”（国立国会図書館憲政資料室所蔵『第二次世界大戦作戦記録』請求記号WOR14872-14873）。同資料によれば、この時点で第11補充処には白人・黒人あわせて計9263名の将兵が待機していた。また、当日の様子は『中部日本新聞』（昭和20年10月30日）でも報道されており、帰還兵は「岡崎駅から名港に到着」し、1万トン級の輸送船11隻で3500名が帰国したと伝えられている（新修名古屋市史資料編編集委員会編2012：11）。
- 4) 「Sixth Army Schedules 4000 More Returnees」（S&S：1945.11.29）
- 5) Hq/Eighth Army, Office of the Special Service Officer, (undated) “Historical Record of Special Service in Japan, Nov.45-Oct.46”（国立国会図書館憲政資料室所蔵『第二次世界大戦作戦記録』請求記号：WOR19470またはWOR19474）
- 6) ローズボームの肩章から、彼の所属部隊は第六軍だったことが分かる。写真には「1946年1月」の日付があり、

- 第六軍の動員が解かれる時期と一致する。以上から推察すると、この写真はローズボームが任務を終えて帰国する際に三村氏へ贈られたものかもしれない。
- 7) アメリカ赤十字社の活動は、以下の第八軍の占領経過報告書を参照。Eighth Army, *Occupational Monograph of the Eighth United States Army in Japan (Aug 45-Jan 46)*, pp.185-189 (国立国会図書館憲政資料室所蔵『第二次世界大戦作戦記録』請求記号: WOR16878) および Eighth Army, *Occupational Monograph of the Eighth United States Army in Japan, vol.2 (Jan 1946-Aug 1946)*, pp. 107-129 (国立国会図書館憲政資料室所蔵『第二次世界大戦作戦記録』請求記号: WOR16885-16886)。
- 8) 以上の整理は、Hq/Eighth Army, Office of the Special Service Officer, “Historical Record of Special Service in Japan, Nov.45-Oct.46” (WOR19470または WOR19474) 及び United States Eighth Army, (1947) “Eighth Army Experience in Japan, 1945-1947” pp. 7-8, 37-38 (WOR-16834) を参照。スペシャル・サービス局の担当将校だった Stovall 大佐がアメリカ陸軍省の W.H. Draper 陸軍次官に語った活動報告でも、レストホテル建設は「アイケルバーガー司令官自身の考えにより発展したもの」と強調されている (“Talk Delivered By Colonel Stovall on the Occasion of the Visit of Under Secretary of War Draper” (1947.9.21) 国立国会図書館憲政資料室所蔵『第二次世界大戦作戦記録』、請求記号: WOR19472)。アイケルバーガーの日本観光ツアーやスポーツへの関心は、“Join the Eighth Army To See Japan And Bon Voyage Solider” (S&S: 1945.11.3)、“Eichelberger Expresses Interest In 8th Army Sports” (S&S: 1945.11.22) も参照。
- 9) 図11の写真下には「22.7」の日付、図12の写真下には「22.8.2」のキャプションがある。
- 10) 『星条旗新聞』によれば、元々この女性はサンフランシスコのアメリカ赤十字社で現場監督官として働いていたが、1948年8月に来日し、千葉県の大井基地(旧陸軍藤ヶ谷飛行場。第五空軍に接收。現在は下総航空基地)の指導員を務めた後、蒲郡のレストホテルに派遣された(S&S: 1949.11.8)。
- 11) “Seashore Hotels Offer Surf, Sports, Tours” (S&S: 1949.9.14)

参考文献

- 阿部純一郎、2018年、「〈銃後〉のツーリズム：占領期日本の米軍保養地とR&R計画」『年報社会学論集』第31号、pp. 60-71.
- 蒲郡市博物館編、2013年、『写真集「明治・大正・昭和 思い出の蒲郡」』蒲郡市博物館.
- 蒲郡市三十年史編纂委員会・蒲郡市教育委員会編、1984年、『蒲郡市三十年史』蒲郡市.
- 蒲郡市誌編纂委員会・蒲郡市教育委員会編、1974年、『蒲郡市誌』蒲郡市.
- 蒲郡市史編さん事業実行委員会編、2006年、『蒲郡市史 本文編4 現代編』蒲郡市.
- 林義久、1996年、『私の終戦直前からの五十年』(私家版、蒲郡クラシックホテル所蔵)
- 栗田尚弥、2014年、「占領軍にとっての横浜・神奈川」公

- 益財団法人横浜市ふるさと歴史財団近現代歴史資料課 市史資料室担当編、『報告書 占領軍のいた街：戦後横浜の出発』横浜市史資料室、pp. 34-45.
- 「新飛翔」編集委員会編、1999年、『新飛翔』名古屋航空ビルディング株式会社.
- 新修名古屋市史編集委員会編、1998年、『新修名古屋市史：第七巻』名古屋市.
- 新修名古屋市史資料編編集委員会編、2012年、『新修名古屋市史資料編：現代』名古屋市.
- 砂本文彦、1999年、「蒲郡ホテルと国際リゾート地開発」、『日本建築学会計画系論文集』第520号、pp. 297-304.
- 瀧兵の歩み編纂委員会編、1961年、『瀧兵の歩み』瀧兵株式会社.
- 運輸省観光部編、1949年、『続日本ホテル略史』運輸省観光部.

あべ・じゅんいちろう / 文化情報学部准教授
E-mail : jabe@sugiyama-u.ac.jp